



イシキ

秘めたる蕾、啄むモノは……。

くく登場人物くく

一組

柳瀬 愛 頭の軽い子。性格は良くも悪くも普通の子。誰とでも話すし、陰口も言う。恋をしてみたと思うっている。同じような性格と見られがちな直美とは仲が悪い。

飯倉 徳夫 荻原翼の幼馴染で、彼女に好意を抱いている。現在、野球クラブ、鬼瓦アイアーズに所属している。

石川 拓馬 徳夫、翼の幼馴染。前は野球クラブに居たが、今はサッカークラブに入っている。

二組

石渡 直美 理恵の友達で、彼女の猫かぶりなところを二重人格とからかっている。貧乏。日焼かして肌は他の女子よりずっと濃い。

長峰 理恵 直美の友達。よく一緒に居る。鬼瓦村の隣の大蛇村から引っ越してきた。元地主で山のいくつかを持っている。比較的金持ち。

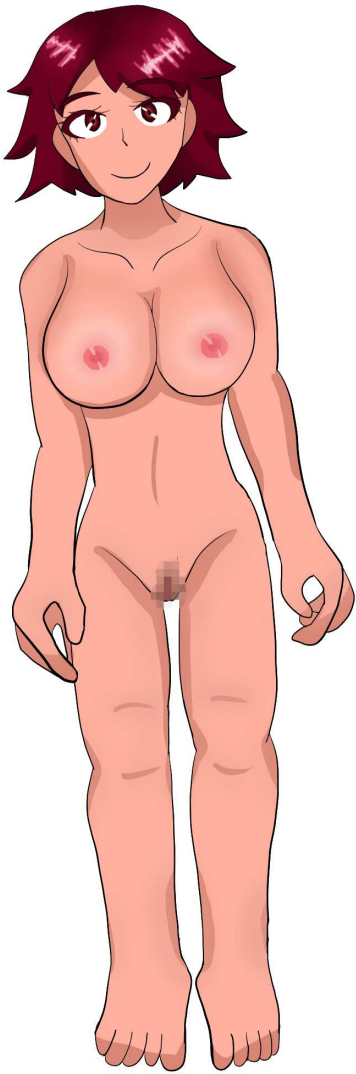
三組

斎藤恵梨香 気の強い子。見栄っ張りなところがあり、正義感もある。スケベな話にはやたらと噛みつくところがある。

沢森明日香 昭利の幼馴染。昭利のことが気になっており、そのことを担任に相談をするが、次第に担任に心が移り、好きと言われて身体を重ねた。

中村 昭利 明日香の幼馴染。チビ。明るい性格でサッカークラブに居る。最近レギュラーになれるかもしれないと頑張っている。

緒方 大輔 大柄。乱暴で性格に難がある。サッカークラブに居るが、技術は低い。スケベで女子からは嫌われている。父親が村役場の重役なため、村では幅を利かせられる。



〜石渡 直美〜

五月も終わりが近づいた頃、梅雨を先取りしたような土砂降りになった。

ざあざあというよりどだどだと大きな音を立てて打ち付ける雨。登校途中も傘や雨合羽、長靴でどうにかできる状況になく、みんなどこかしら服が濡れている。

あまりに濡れたため、体操着に着替えている子も多く、着替えた服は椅子の背もたれにかけて乾かしている。

教室の湿度は高く、廊下から入るとむっとした臭いが漂い、教員達は顔を顰めてしまう。

「まいったなあ、この雨……」

外を見ながら飯倉徳夫が呟く。

「そうだねえ……。こんなに降ると帰るとは大変だよな」

彼の呟きを聞いて荻原翼が声を掛ける。彼女も既に体操着姿だった。

「もうすぐ試合あるのによ。これじゃ練習できな～よ」

来週は野球クラブの試合がある。次の試合でスタメン予定の徳夫は、一日でも練習を欠かしたくない。それにこの土砂降りでは試合自体延期になりかねない。そう思うと気が焦った。

「な、なあ、翼、応援に来てくれるよな？」

思いだしたように翼に話を振る徳夫に、彼女は少し驚いた表情になり、しばし考える。

「ええと、そうだね。ねえ、拓馬君は試合あった？」

翼はもう一人の幼馴染、石川拓馬に話を振る。

「ん？ いや、別に無いよ」

「そう。じゃあ、一緒に応援行こうよ。ね」

「……つつつても、俺も練習あるし」

拓馬は少し前まで徳夫と同じ野球クラブに所属していた。それがいつの間にかサッカークラブに転向していた。運動が得意な彼だから、サッカーでもめきめき実力をつけ、最近は試合に出ている。

「いいじゃない。少しぐらい。たまには野球クラブにも顔出しなつて」

「むしろ出しづらいんだが……」

「この前は拓馬の応援に行ったんだし、今度は俺の応援もしてくれよな」

「うん、いいけど……」

ちらりと拓馬を見るが、彼は特に気にしていない。というより、積極的に関わろうとしない。

「よし、決まり！ 俺、張り切っちゃうから」

意気揚々とする徳夫とは対照的に、翼は口を結んで視線を下げる。

徳夫と拓馬は彼女にとって大切な幼馴染。けれど、その関係が少し変わってきている気がする。今日この頃。野球の試合に顔を出しにくいのはわかるが、そもそもサッカーに転向した理由がわからない。むしろ避けられているような気さえした。

「な、良いだろ？」

「え？ ごめん、聞いてなかった」

「なんだよ、もー」

「ごめんごめん！ あはは」

むっとしながらも笑う徳夫に合わせて笑ってみせる。

逆に徳夫は翼に積極的に関わろうとしてくる。その理由はあまり考えたくない。友達という距離が壊れそうだから。

しばらく、もうしばらくはこれまでの関係で居たい。そう思い、先のように拓馬を誘うがなしのつづて。

「うん、じゃあ、今度ね……」

変に断れば徳夫の気持ちがおこじれる。

どうするのが正解なのか、それともこのまま変わって行くしかないのか？ そんな気持ちがあった。

十

「あー、なんだよ。俺、この映画見たって……」

雨の日のクラブ活動は、グラウンドを使うクラブの場合、基本的に視聴覚室でビデオ鑑賞になる。

当たり障りのない映画やアニメを流し、感想文を書いて下校が主な流れだ。

その日の映画は少し前に流行ったホラー映画で、見たことのある子も多かった。

緒方大輔もその一人で、彼はぐちぐち文句を言いながら、次はどうなる、最期はああなると内容を先に話してしまう。

その凶々しさに煙たがる子も居るが、学年でも大柄な彼に面と向かって文句を言える子は少ない。さらに彼の父親が村議会議員の弟兼秘書。余計なことを言えば睨まれることもあり、彼の横暴を咎められる人は少ない。また、その兼ね合いもあって鬼瓦村の有力土建会社社長の息子である吉川雄二とも仲が良い。

「静かに見ないとだめだよ。見てない人とか居るんだし、先生も見えてないんだよ」

テニス部顧問の若山比呂がむっと言う。

「まあ、怖いシーンになったら教えてくれると助かるけどな」

けれど怖がりなことを隠さない彼の言葉にどっと笑いが起きていた。

比較的若く、好青年な彼は生徒達に人気があり、よくこういう冗談を言っっては場を和ませていた。

「若山先生、居ますか？ 旧校舎の雨どいの件なんです」

途中、三組の担任、志垣隆がやってきて比呂に手招きをする。二人はドアのところで窓を見ながら話し始めていた。

「ああ、はい。志垣先生……。雨どい、やっぱり壊れちゃいましたか……」

「はい、それですね、修理があるので手が空いているのならすみませんが……」

「ええ、はい……そうですね……」

最近の雨で旧校舎の雨どいが壊れてしまい、一部が通行止めとなっている。そのことの相談らしく、二人とも面倒臭そうに話していた。

「先生、この映画、面白くないんですけど」

すると、陸上部の沢森明日香が声を上げる。彼女は隆を見て生意気そうに言う。

「沢森さん、そういう態度は良くないよ」

「でも、こんなスプラッター映画なんて見てもつまらないです」

「うーん、そうか。じゃあ、そうだな。宿直室に別の映画があつたなあ。ホラー苦手な子もいるみたいだし、別の映画を見ようか？」

ビデオを一時停止して手を上げて尋ねると、数人の子が手を上げる。

隆はしばらく考えた後、ぽんと手をうつ。

「じゃあ、もう一つの方の映画見たい人は宿直室へ移動だな。移動する人」

「はい」

「はい」

「はい」

大輔が手を上げると、石渡直美が続いて手を上げる。

ホラーが苦手な徳夫もこっそり手を上げる。ついでに拓馬と翼を肘で突くが、二人とも映画に興味津々で首を振る。

「裏切り者」

「いや、お前だろ」

本当は翼と一緒に居たいのだが、ホラー映画を見て無様な悲鳴を上げること考えると、素直に移動することにした。

「はい」

陸上部の斎藤恵梨香はホラーが苦手なわけではないが、複数のクラブの子が一堂に介してテレビを見ると、雨でしけた空気がなんとなく嫌で、移動を希望する。

「それじゃ私も行こうかな」

同じ陸上部の沢森明日香も手を上げる。最近急に大人びた雰囲気のある彼女は、キヤードキヤー喚く子達を見て白けている素振りすらある。そんな彼女だけれど、先ほどからどこかわそわし始め、廊下の外をちらちら横目で見ていた。

「他に行く人は？」

「じゃあ、私も行こうかしら。ね、真奈も行くでしょ？」

綾子は手を上げると、真奈の手を取り、無理やり上げさせる。

「え、私はちょっと……」

「ええ、二人とも行くの？ それじゃああたしも行こうかな」

愛も手を上げようとしたが、綾子がそれを制す。

「ダメ。愛は煩いからここに居なさい」

「えー、なんで？」

ぶつくさ文句を言うが、綾子が「ダメ」と言うのと仕方なく頷く。

「他には……、あと一人ぐらいなら……」

指折り数えながら宿直室の広さを考える。

「あ、あの、あたしも……」

少し怯えながらおぼろげに手を上げる漣。普段は活発な彼女だが、実はホラーが苦手。まだ最初の山場も無しに表情をこわばらせていた。

「あはは、漣ってば怖がりだね」

「ちが、あたしはこういうがきっぽい映画嫌いなだけだもん！」

「よく言う。おこちゃまなくせに」

「なな！ なによ！ 直美のクセに」

直美がくすくす笑いながら漣を指差すと、彼女もむっとして言い返す。だが、悲しいかな小柄な漣では直美と言わず、後輩の子にすら見劣りすることも……。皆ケラケラ笑っていた。

「じゃあ、他の子はここで映画を見ているように」

隆は異動希望の子を連れ立つと、宿直室へと向かった。

隆は宿直室で予備のDVDを選ぶ。やってきた生徒は上級生のみだったので、トレンディ俳優が多く出演している刑事ドラマを選んだ。

「先生は作業があるから行くけど、皆は静かに頼むよ。この雨で水漏れ箇所があって、山先生とそこの掃除と撤去をしないといけないんだ」

若手の隆はこういう時に駆り出されやすい。彼は雑巾とバケツ、他にゴム手袋を持って宿直室を出た。

「この雨だもんな。旧校舎とかやべーよ」

窓を叩くように降る雨を見ながら大輔が呟く。

鬼瓦校の旧校舎は木造の二階建てで、■学年が使っている。

設備も昭和の香の残る古臭いストープ、電灯が白熱球で雰囲気暗い。

それでもトイレだけは新しく増設されている。理由はあまりに古臭くてお化けが出ると噂され、生徒が怖がり使わなかったため。けれど古いトイレは取り壊されず、今もある。それが噂を根付かせていた。

「旧校舎はやだね」

漣がぶるっと震えながら呟く。怖がりな彼女は旧校舎が大嫌い。古いトイレの傍を通る時は不自然に横を向いて歩き、そのせいでよく何かにつまずいたりぶつかっていた。

「お化けが出るって言いたいのか？ 漣って子供ね」

嗤いながら綾子が言うも、漣は言い返さずに耳を塞ぐ。

「あーあーきこえないーい」

滯は体育座りでテレビの前にしゃがみ込み、じっとドラマを見る。

「それじゃ聞こえないんじゃないの？」

直美は首を傾げつつ、テレビを見始めた……。

十

比較的広く椅子の予備の多い第二理科室は囲碁将棋に使われる。

将棋の駒、碁石の音がはじける音が定期的に響く静かなものだった。

「はい、王手」

「あ……。参りました」

三組の石田仁は後輩を相手に将棋を打っていた。

小柄で眼鏡の仁は囲碁将棋クラブでは敵なしの強さを誇っていた。といっても彼に将棋の才能があるわけではない。彼は独自で指南書を読んで勉強をし、さらに相模大野の将棋の集会所にも通っていて、そこで教わっている。

クラブの子のほとんどは将棋のルールをある程度知っているとこの程度で、指南書を読むにしても、その戦法がどうして効果的なのか、どう有効なのかを理解できていない子ばかり。知識の差で仁が勝ち越しているのだ。

去年までは指導の出来る教員が居たのだが、定年を迎えた為に今はいない。また、強かった先輩も卒業した。

その状況を知っていた仁は自分が無双できると意気揚々と囲碁将棋クラブに参加し、その通り連戦連勝を誇ったわけだ。

「うん、あのね、この手筋が良くなかったんだよ。それから……」

感想戦を始めるのも指導の為ではない。自分が強いということを印象付けるためのパフォーマンス。

それでも純真な後輩は面白そうに聞いていた。にわか仕込み、道場で聞いた話を適当に話す仁ですら尊敬のまなざしを向けるのだ。

普段、クラスでは吉川雄二などにからかわれ馬鹿にされ、中村昭利のように仲の良い女の子がいるわけでもなく、笠原実のように一芸に秀でているわけでもない。どちらかというと満や武則のようなはっとしないチビのヒエラルキー。常にうつぶんがたまっていた。

それらを解消するのに都合が良いのがこの囲碁将棋クラブ。もつとも、その勉強の為に相模大野の集会所でべこぺこ頭を下げて太鼓持ちをしているのだが……。

「わあ、お姉さん強い！」

クラスの端っこの方で声がした。

「対局が終了したらありがとうございます。でしょ？」

「あ、はい。ありがとうございます！」



お辞儀をし合う女子部員同士。後輩らしき女の子は嬉々として感想戦をしており、もう一人の女子はそれを事細かに解説していた。

「……」

彼女は深窓の令嬢こと御崎澄子。三組を代表する、いや、学年、校内一と言っても良い美少女だ。話に聞く分だと吉岡雄二の許婚らしいが、彼の居るサッカー部には不参加。

それよりなにより、彼女が強いということが問題だ。まさか自分より強い……。そうなると思碁将棋倶楽部での優位性が保てない。仁は焦りを感じて始めていた。

「ねえ、先輩と御崎先輩、どっちが強いの？」

「え……」

二人の試合を横から見ていた子がそんなことを言う。今一番困る提案だ。

「えー、やっぱり石田先輩だよ！ だって沢山組み方知ってるんだよ？ 強いってば

」

「そんなことないよ。御崎先輩なんていっつもいぎよくのまま勝っちゃうもん」

「それは単にお前が下手なんだろう」

「なによ、あたしの方があんたよりつよいでしょ？」

「なら勝負すつか？」

「いいよ」

後輩二人が喧嘩を始めたところでこの話はお流れ……と思いきや、

「ねえ、先輩は御崎先輩と勝負しないの？」

「えと……」

学業優秀が将棋の強さに直結するわけではない。けれど、自分も素養として強いのではなく、知識の無い子相手に知識を振り回して勝つやり方にすぎない。ある意味自分の力量を知る仁は尻込みしていた。

「ねえねえ、こっちこっち」

「はいはい……あら、貴方は……ええと、同じクラスの……石田、石田君だよね」

「あ、はい。よろしく願います」

「うん、よろしく願います」

普段は窓の外ばかり見ている仏頂面の女という意識しかなかったが、こうして対面して笑顔が返されると、それが愛想笑いでも心が揺さぶられる。

だが勝負は勝負。この一番が今後の自分の学校生活を左右する重要な局面なのだ。

「それじゃあ、お手柔らかに……」

初手3四歩。対する澄子は7六歩。あからさまな角交換。仁は受けて立ったが……。

りのようにカクカク動いたりで、とても視聴に適したものではなかった。

「なんだよ、これ！」

短気な大輔は機器を止めると、イジエクトボタンを押して取り出す。

ディスクを見ると何かを零したのか、いくつも汚れが見える。そこにカビが生えていて、そのせいで読み込みができなかったようだ。

「これじゃあ見れないじゃん。どうする？」

「どうするもこうするも……、今から戻る？」

視聴覚室の方向を指差す恵梨香に滯は首を振る。

「今戻ったら、きつと怖い場面だもん、やだよ」

「じゃあ、どうしよ。他になんかある？」

直美は他にDVDが無いかと棚を探し始める。すると、大輔と徳夫も探し始める。

「ねえ、先生に聞きに行こうよ」

真奈がそう提案するも、探検ごっこに夢中の三人は聞く耳を持たない。

「あ……なんかあったよー」

仕方なく、真奈が比呂の元へ行こうとしたところで、綾子がわざとらしく声を上げる。彼女は戸棚から一枚のディスクを取り出す。

タイトルが無いDVD RAMだった。

「なんだろ、それ」

「ホラー？」

滯の問いかけに直美が面白がって応えるので、彼女はむっとして頬を膨らませる。

「さあ？ とりあえず見てみようぜ」

このままならだらしするよりはと、徳夫が促すと、綾子はDVDをセットして早速再生ボタンを押す。

最初は暗い画面。そして青い画面が出て、いくつかの四角い枠が出る。

一つ目は真っ黒で何も無い。二枚目は女が映っていて、三枚目ではどこかの教室の画像があった。

「なにこれ？」

不穏な雰囲気に徳夫が呟く。

「いいよ、再生しようぜ」

大輔は女性の写真に何かを察したのか、鼻息を荒くさせていた。

「ちよっと、やめようよ……」

恵梨香が止めるも既に再生ボタンが押されてしまい……、

『あん、先生のえっちい』

「え……」

「お……」

恵梨香の嫌悪感を含む声と大輔の期待感を含む声が被る。

「ちょっと、これってAVじゃない？」  
なぜ宿直室にそんなものがあるのかも問題だが、それよりもそんなものを自分達が見て良  
いのが問題だ。

比較的真面目な恵梨香は停止ボタンを押そうとするが、大輔がそれを阻む。

「ちょっと、緒方、邪魔しないでよ」

「うっせーな、いいだろ、ちょっとぐらいよお」

「ダメでしょ。こんなもの！」

ムキになって怒る恵梨香は手を上げるが、大輔はひるむ様子もなく背中ですれを受け、  
その間も女の子は男に甘えた様子で言葉を並べ、服に手を掛け、胸元を開き始める。

「やだ……」

滯は自分の胸元に手を当て、それと比べるように見てしまう。

「すごいね、この人のおっぱい……。あたしよりあるんじゃない？」

直美は体操着の胸元を持ち上げ、画面のそれと比べる。

直美のおっぱいもテニスボール、グレープフルーツ程度の大きさがあるが、動画の女の子  
のおっぱいはそれより一回り大きい。

画面ではスーツ姿の男が椅子に座っており、その前で女の子のブラジャーに手を伸ばし、  
探るように揉み始める。

「うわあ、おっぱい揉んでるよ……へえ……すげえ……」

大介の問いかけを無視しているのか、瞬きせずじつくりと画面を見る徳夫。口を開けつ  
放しにしてアホヅラになっていたが、そんなことを気にするよりも、画面に集中したい気持  
ちが勝っていた。

「やっぱ男子っておっぱいが好きなん？」

直美の問いかけに徳夫も大輔も無言で頷く。

「あはは。男子スケベー」

けらけら笑う女子二人。それを冷ややかに見つめる恵梨香と真奈。

「もう、私、先生のところ行って来るから、それまでににもとに戻しておきなよ」

恵梨香は付き合っていないと立ち上がり、さっさと出て行ってしまふ。

「あ、わたしも……」

真奈もそれに続いて出ていこうとしたが、手を掴まれる。

「真奈は残るでしょ。じゃないと、私、口が軽くなっちゃうかもしれないし」

綾子の問いかけに真奈は無言で従う他に無かった……。

大工道具を片手に、雨合羽を着こみながら雨どいを前に腕組みする男を見て、いそいそと駆け足になる。

「せーんせ！」

窓からぱつと顔を出し、弾むような声であいさつをすると、男も驚いたようにリアクションをみせる。

「なんだ、天使かと思ったよ」

彼女の担任である志垣隆は明日香を見ると笑顔になり、キザなセリフを探してくる。

「んふふ、先生ったらまたそんなこと言って〜」

「僕にとって天使さ。君に会えると思うから学校に来れる。こんな雨の日でもね。明日香も同じ気持ちだったら嬉しいな」

「んっ！ んもう……別にあたしはそういうわけじゃないし……」

すらすらと続ける隆に明日香は返す言葉が見当たらず、気恥ずかしさと恋心をくすぐる言葉に乗せられ、気持ちが昂ってしまう。

「それよりDVD はいいのかい？ 感想を書かないといけないんじゃないかな？」

「だって、ホラー映画見て感想なんて言われても……。ただ人が死んで怖かった〜ぐらいしかないし〜。それに、この前先生と見た映画じゃないですか」

「……そうだったかな？」

「瞬隆は周囲を見る。誰か聞き耳を立ててまいかと彼なりに警戒していた。

「見ててもつままないから、さぼっちゃった」

ニコリと笑う明日香は文句なく可愛らしい女の子。ただ、その唇は赤さと艶を見せる。前に買ってあげたリップクリームを塗っているせいだろう。意味深に端を引き、わざとらしく音を立てて唇を開くと、舌をべろりと舐める素振り。人差し指で唇を撫で、上目遣いで見てくる。

この仕草をされると隆の気持ちも昂る。まだ年相応の雰囲気を残す明日香の小さくて可愛らしい唇なのに、大きなミミズとかえげつないキノコというべきそれを前にするとぱくつと大きく開いて美味しそうに啜えてくる。

最初は探るように口に含む程度。その後で竿まで飲み込み、咽て涙目になる。

まだフェラチオは苦手らしく、たどたどしく舐め、啜えてくれるけれど、教え子にチンポを啜えさせ、さらには欲望を吐きだし、飲ませる一連の行為に背徳感を刺激させられる。

オシリを持ち上げると恥ずかしそうにうんちの穴を隠す。そんな彼女をイジめるように穴を舐めあげ、割れ目をなぞる。そうするとすぐにふにやふにやしだし、膝を着いてしまう。そこからは年上の男を教え込む。

濡れ具合の足りないマンコにぐいぐいねじ込むと痛みに悲鳴じみた声を上げるから、少し待ってあげる。優しく髪を撫でてあやしてあげて、奥から愛液が漏れ始めたところで少しずつ動く。

明日香は敏感だからすぐに良い声で鳴いてくれる。時に求められ過ぎて疲れてしまうこと

もあるけれど、ただでセックスができるので我慢すべきだろう。

特に不満があるとすれば、他の女子と比べて身体の育ち具合がまだまだ遅いこと。おっぱいが大きくなる前に乳首が黒くなっては萎えてしまうかもしれない。

学校ではつっけんどんを装うけれど、こうして隙を見つけては愛らしく付きまといてくれるので楽しい。もちろん、いつだれにばれるかわからないという怖さがあり、薄氷を歩くことに変わりはないが……。

「まったく悪い子だな……。罰として先生の仕事を手伝ってもらおうかな……。」

「はい……。」

不平そうに言うけれど、その口は笑いが見える。こういう悪戯っぽい可愛らしさは彼女のよきな子の特権だろう。

「この雨どいを支えて」

「これ……?」

古くなり斜めになった雨どいを持たせると、明日香の背丈だどつま先立ちになってようやく支えられる。体操着姿の明日香はプルプル震えながらたち、雨に曝されて徐々に服が肌張り付き始める。

今日はグレーの目立たないタイプのスポーツブラ。育ち始めのおっぱいには悪いだろうと心配してしまう。

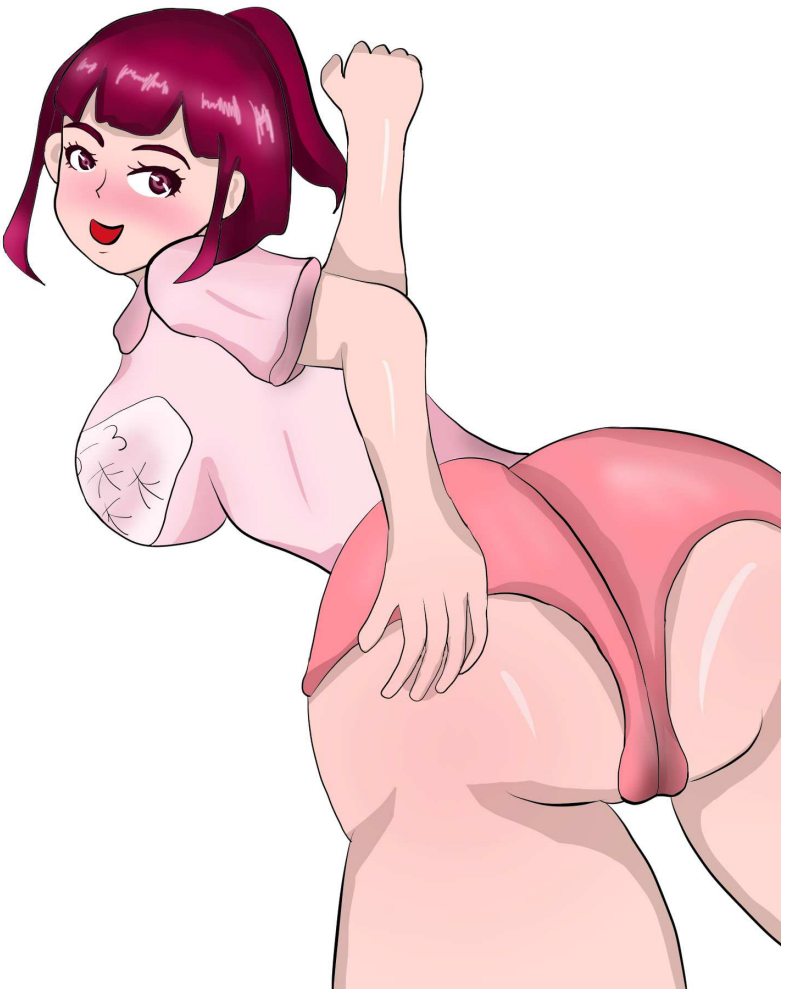
「どうした? 震えてるよ」

「だって、これ……あたしじゃ背が届かないし……」

「そうか。じゃあ、先生が支えてあげないとな……」

「え、あ……ちよ……んっ」

背後から手を回し、服越しにおっぱいを弄る。締め付けの強い下着のせいで固くなっているけれど、ベッドの上では柔らかく手が沈むおっぱいだと知っている。それに乳首を擦るとすぐに感じてしまうのも。



「あん！ んっ……せんせ……んっ……やあん、乳首さわってるってばあ……」

「仕方ないじゃないか。こうやって支えないと、倒れちゃうだろう？ それに乳首っていつでも、小さくてわからないよ。気にしない気にしない」

「んもう……気にしてるのに……」

雨音に隠れて会話をする二人。唇を尖らせる明日香は非難めいた視線を向けるけれど、その仕草も愛らしい。

もう既に下半身は勃起してしまう。今日は雨が強いから、送るついでにホテルに寄るのも良い。宿直は比呂に任せ、自分はしつぽりとしてしまおう。彼には夕飯でもおごればそれでいい。自分はその間に教え子を美味しくいただき、美味しく飲ませておくのだ。

「……」

「んっ……わかってるくせに……」

乳首を掴みくにくにく揉む。雨に濡れ始めたにもかかわらず温かさを感じる。恥かしさと興奮で熱くなっているのだろう。

オシリのほうも温めてあげたいと、片方の手を回し、くすぐるようにまさぐる。

「んう……はあ、はあ……んっ……」

割れ目に沿って撫でると違和感。布地が変にでこっとなっている。

「ん？」

軽くブルマを引っ張ると、ピュアハートで買ってあげた例のパンティだった。

「沢森、気に入ってくれたんだな。エッチな下着、可愛いぞ」

「ちが、誰がこんなの……。他に無いから仕方なく……」

「でも、今日みたいな着替えがある日はダメだぞ？」

「だってえ……最近……」

「ん？」

「最近、先生、いじわるなんだもん……。好きって言ったくせにさ……」

ツンとしながら言う明日香は不満気味。最近仕事の仕事の兼ね合いであまり可愛がってあげていない。たまに日を見てもホテルが満員。車で不完全燃焼に終わっていた。

相手が相手だけに場所を選ぶこともあり、かといって家に連れていくわけにもいかず、隆としても欲求不満だった。

「ごめんな。仕事が忙しくて……。提出物とか色々あるんだ。こう見えても」

「……うん、ごめんなさい。先生、雑用とかもあるし、忙しいのわかってるんだけど……」

こういう素直で従順さを持つところが彼女の都合の良いところ。この物分かりの良さを上手く使えば良いのだが……。

「だからこうやってエッチなパンツを穿いて、先生を誘惑しにきたんだね？」

「……ちがいます」

「でも、このパンティ……先生と初めて愛し合った記念に買ったんじゃないか？」

「……ん、先生が無理やり……愛して来たんじゃないですか……」

「気持ちよかったよ。明日香は？」

「……ふん」

「明日香……気持ちよかった？ 僕は凄く、とっても嬉しかったよ、好きな人と愛し合えて、気持ちよくなれて」

「……うん、良かったです……。先生とエッチ、気持ちよかったよ。あたしも」

「そっか……嬉しいな。じゃあ、この下着を穿いてきたのは……」

「先生にエッチしてほしくって……だから、これ……」

「僕もしたいよ。だから今日、一緒に帰ろう？ 送って行ってあげる」

「……うん」

「くりと頷く明日香。送っていく時は少し遠回りをして帰る。つまり……」

「ただ、困ったことがあるんだ」

「え？ なに？」

明日香ははっとして隆を見る。彼女はよほどセックスがしたいらしく、困ったことに不安そうな表情をしていた。

「先生のおちんちん、大きくなっちゃったんだ」

ジャージを膨らませる前はこんもり山を作る。それを見て明日香は若干呆れた様子になり、すぐに意味深に微笑む。

「どうすればいいの？ これ……」

指でつつんと突き、くすつと笑う。

「小さくならないと恥ずかしいなあ。明日香はわかるかい？ どうすればいいか……」

「うん。えっとね、先生、おしっこしたいんだよ。だからあたしが先生のおしっこ手伝ってあげる。んふ……あーん……ちゅぶ……」

ズボンの前を軽く下げ、トランクスからチンポを取り出す。唇で先っぽにちゅつと口づけすると、すぐに大きく口をあけ、あむつと啜え込む。

「ああ……温かい……んっ……」

「んちゅ……ぺろ……んむ……はむ……んちゅんちゅ……ぺろ……ちゅう……」

亀頭の先っぽを舐めあげ、滲む粘着質の汁をちゅうちゅう吸う。生臭く粘つき、いやらしけれど、唾液に混ぜて飲むと身体の内から熱さが起こる。

お腹の奥が熱くなり、腹がすわるといふか、身体が重く感じる。それなのに意識だけは昂り、どこか浮いた気持ちになる。

「んちゅ、ちゅう……ちゅっばちゅっば……んごく、ごくくり……んちゅ、ごく……はあ……先生の、濃くない？ 我慢汁……」

んべえと飲み込めなかった我慢汁を唾と一緒に吐きだし、じっと見る。





「ああ、最近は明日香と愛し合っていないから、たまっちゃって……」  
「んふ、そっか。そんなにあたしとエッチしたいんだ……このスケベ先生のダメだめオチンポちゃん、んちゅ……ちゅぶ……はあはむちゅ……んちゅ……んふう……」  
鼻で息をしながらなんともチンポを啜えて頭ごと前後する。彼女のサラサラの髪が雨で湿りながら肌に張り付く。体操服も濡れが広がる。  
「んちゅっ、んちゅう……ちゅっばちゅっば……ああん、おいし……んちゅ、ごく……」  
じゅっぽじゅっぽと音を大きく、荒くさせながらストロークを強くする明日香。チンポは慰められるどころかギンギンに固くなり、尿道を我慢汁がどくどくと走る。  
明日香の唇からだらだらと涎が垂れ始めると、もう明日香のあそこも濡れ始めている。例の紐のようなパンティでは明日香の愛液を受け止めきれず、雨でぬれないはずの部分が濡れ始めていた。

「明日香ちゃん、ブルマ、濡れてるよ……」

「うちゅ……ん、ぬちゅっほ……雨だもん……んちゅんちゅ……ごく……ちゅば……」

「くすくす、明日香ちゃんは濡れやすいからね……エッチな臭いがしてるよ」

「してないし……んちゅっほ、じゅっほじゅっほ……」

抗議しつつもチンポは離さない。明日香は亀頭をちゅちゅうと強く吸い、手を激しく前後に扱く。

「うっ、明日香ちゃん……急にそんな……うっ」

「ふんだ、先生なんていじわるだもん。白いおしっこ出しちゃえばいいのよ……」

陰嚢を弄り亀頭強く吸う。竿を抜いて快感を強めさせら、最近の欲求不満の濁りを誘われる。このまま出してしまうのはもったいないのだが、舌なめずりする明日香にぶっかけるのも征服欲を刺激させられる。それにこの雨なら誤魔化せるだろう。

「うっ……くう……明日香、出る……」

「んっ、でちゃうの……うん……先生、気持ちよくなっていいよ……あ、あ……んっ！んちゅぶ……ふはっ！けほけほ……ああん、すごいよお……先生、すごい溜まってたんだね……」

ぴゅっと吐き出される隆の精子。明日香はそれを体操着で受け止め、その後、慌てて口で受け止める。けれど、唇、口腔内、舌の温かさに触れたチンポは勢いよく第二、第三の射精をし、その勢いに口を離してしまう。

「あーんもう……先生のばか……。出し過ぎだよ……」

手に絡みつく精子を口で吸い取りながらごくりと飲み込む。服にも唇にも頬にも精子がこびりつかせながら、明日香は不満そうなそぶりで笑っていた。

身体的には満足できないだろうけれど、精子を受けたことで精神的な満足があるらしく、

明日香は笑顔を零しながら後片付けをしていた。

吹奏楽部の葉山和人は楽譜を教室に忘れていたことを思い出し、クラブの途中で抜け出した。急いで戻ろうと廊下を走っていると、曲り角でどんとぶつかった。

「きゃ……」

「わ、ごめん……大丈夫？」

しりもちを着きそうになる相手の手を咄嗟に掴み、引き起こす。

「ありがとう、あら、葉山君じゃない」

「斎藤さん。どうしたの？ クラブは？」

「私はこの雨だもん。視聴覚室でビデオだよ」

「そう。僕は教室行こうとして急いで、ごめんね」

「んーん。大丈夫」

紳士的な和人の態度に恵梨香は自然と笑顔になっていた。先ほどの宿直室でのことを思いだすと、なぜ同い年の男子でここまで違うのかと不思議でならない。

「葉山君は大人だね。誰かさんたちとは大違い」

「どうかしたの？」

「うん。ちよっとね。なんか宿直室で変なDVD見つけたんだけど、もう男子ってさいてー。っていうか、女子にもちよっと困った人が居るのよね……」

苦い顔つきでぶつくさ呟く恵梨香に和人は要領を得ずに首を傾げてしまう。

「ああそうだ、若山先生見なかった？ 言いつけないと」

「若山先生？ ええと、さっき旧校舎の渡り廊下に居たよ」

「え、あそこの渡り廊下……」

旧校舎への渡り廊下は鬼瓦校の不気味スポットの一つ。昼でも薄暗く、どこか湿っぽくて嫌な雰囲気がある。

ホラー映画ならともかく、実際の不気味な場所には恵梨香も抵抗があり、一人で行くのに躊躇してしまう。

「一緒に行こうか？」

そんな気分を察した和人はくすくすと笑って提案する。

「葉山君って優しいね。お願いするわ」

不気味スポットを怖がる子供っぽさを笑われたような気がしつつ、渡りに船と恵梨香は頷いた。

局面は終盤をおわせる展開だった。

やぐらを組んだ仁は攻められ続け、いつのまにやら金を取られ、砂の城。対する澄子は居玉にして堅牢を予期させる手持ちの金二つ。

盤上を走る角はここまで強かったのだろうか？ 角交換からの退きの角は馬となり、仁の陣地を縦横無尽ならぬ対角無尽……。

切り裂かれるも一矢報いようと手を伸ばすが、あと一步銀が伸びない。対し自分は詰めるをかけられ、受けを間違えれば数手を経て詰み。

何か策は無いかと盤面にのめり込む仁。対する澄子はそれを見下ろし、既に勝ったつもりすら見せていた。

「……」

「ええ、すごい、御崎先輩さすがー」

「ええ、石田先輩が圧されるなんてなー」

状況は周りから見ても仁の劣勢。考えれば考える程、どうあがいても詰みなのではないかと思えてくる。

盤上此の一手は見えず、逆にあと一步銀が上がれば、いや、桂馬が少しずれているだけでも……。

相模大野で学んだ技術を思い起こす。自分より強い奴と差す時のテクニク。それは駒を雑に差すこと。音は極力出さないようにすること。

12、89なら外側に、7643なら内側に、二、八九は中央に寄せる。できるだけ雑に、駒同士がぶつかるように……。

そして薬指は折り、人差し指と中指は閉じて駒を隠すようにする。意識させないようにそっと押し出す。兎に角自分が劣勢だとアピールすることも忘れない。

これさえできれば格上にも勝てる。大丈夫。道場レベルで盲将棋ができる者などいないのだから……。

「あら……」

どきりとした。もしかして気付いている……。

「どうかしたの？」

「雨どいが壊れてるから気になって……」

「ああ、本当だ。雨すごいよね」

ほっとした。当然だ。この技術は一番練習したのだ。クラブでも何度か世話になった禁じ手だ。たかだかお嬢様ごときに見破られるはずがない。このままいけば三手先で自分の勝ち。将棋倶楽部のチャンピオンは自分なのだ……。午後の優越は守られるのだ……。

「……うーん、参りました……」

「ありがとうございます……」

「わー、やっぱり石田先輩の方が強いんだ！」

「うーん、本当だ……でも、御崎先輩だって強かったよね」

「ああ。そうだね。うん、とっても……」

「それじゃあ感想戦を……」

「え……」

「えっと、最期の詰ませ方だけ……」

「……」

ぱちぱちと駒を並べていく後輩の女の子。その手際はよく、終盤の数手を覚えていているかのように巻き戻していく。

「ああ、ごめん。今日はもうなんか疲れたし、また今度……」

「えー、でも上達するには感想戦をしつかり……」

「雨も強いし、これから感想戦をすると時間がかかるわ。だから今日はこれでおしまい」  
仁がやきもきしていると澄子が外を見ながら言う。当然だ。この女のバカみたいに長い髪は濡れたら乾かすの大変だろう。仁はほっとしながら駒を乱暴に片付ける。

バラバラとこぼれる駒にさすがの後輩も諦めたらしい。

「……」

ほっとしたところで顔を上げると、澄子はつまらなそうに口を結び、視線を一切剥けようとしなかった。

「……」

気付いている。どういう理由でごまかしたのかはわからない。いや、わかる。ここで自分を糾弾して時間をかけたところで、帰りが遅くなるだけ。この雨の中、遅くまで残りたくないからだ。だから不正に気付いて居ながら何も言わないのだ。そして自分への興味も一緒に捨てた。棋士として、横好きとすら認められずに切り捨てられる。まるで角に蹂躪された棋譜のように……。

十

教室に似た室内、椅子に座る男と、その股座で頭を前後させる女の子。先ほどから鼻につく高い声で「ああん、ううん」とねばっこく唸る。

「……」

正座しながら、目を丸くさせてそれを見る男子二人。滯と直美は膝を抱えながら、たまに照れ隠しでちやかしながら見ていた。

「いいな、俺も触ってみてえ……」

大輔がぼそりと呟く。彼の短パンは妙に股間部分が膨らんでおり、それを隠す為に不自然な前傾姿勢になっていた。

「へー、おっばいに興味あるんだ？」

それを綾子がおかしそうに尋ねる。

「そりゃあるだろ、なあ？」

「あ、まあ……」

徳夫もそれに頷く。

「じゃあさ、触ってみる？」

「え！？ いいの！」

綾子の唐突な提案に二人は声を裏返させる。

「あはは。バカみたい」

大げさに嗤う綾子に、二人はからかわれたとバツの悪い顔になる。その一方で、肩をこわばらせ、俯く真奈。

「いいよ、触っても……」

「おいおい、しつこいぞ……」

これ以上からかうなど、手の平でしつしとする大輔だが、その手が取られ、布に触れる。少し弾力があり、温かい。抵抗のある布地の感触。なんだろうと見ると、彼の手は綾子の体操着の胸元にあった。

「え……おい……」

一瞬にして股間が凝固する。かっと身体が熱くなり、鼻息が荒くなる。

「ちよ、え、なんで？」

「なんでって、言ったじゃない？ 触ってみるって？」

「そりゃそうだけ……」

おっぱいに触れさせてもらいながら、綾子を見る。

ネコ目で気の強そうな彼女。目鼻顔立ちが良く、赤い唇は艶っぽく潤んでいる。おっぱいはそこそこ大きく、今も指先に弾力を伝えており、早い鼓動がわかる。

「あ、えと……」

指を動かしたところで、離された。

「おい……」

「いいでしょ？ 触らせてあげたんだから。代わりにあんたのも見せるのよ？ それでお

相子でしょ」

「え、俺の？」

「うん。ちんちん」

「……！！！」

綾子の率直な言葉に宿直室の空気が凍りつく。

「ちよ、綾子？ ちんちんって、大輔のおちん……ちん？」

漣が早口で聞き返すと、綾子はさも当たり前と頷き返す。

「だ、だって……おちん……って、そんな……エッチなこと……」

そうは言いつつ、漣も興味があり、大輔をちらちら見る。

「お、おれはやだよ、そんなん恥ずかしいっての」

「えー、卑怯だよ。おっぱい触らせてあげたじゃん」

「そりゃ触ったけど、でも、そんな約束……」

「怖いんだ」

「こわ、何が怖いんだよ！」

「おちんちん見せるの」

「いや、だってほら、濡みたいなのいるし……」

ちらりと濡を見て咎めるように言う。他の女子に比べて初心そうな印象を受ける濡の前で性器を露出させるということに変な倫理的な抵抗があるらしい。

「なに言ってるのよ。同級生じゃないの……」

「あ、そういう意味で言ったの！ ったく、人のこと、子ども扱いして！ これでもおちんちんぐらい見たし！」

「え……。おち……見たって……」

「この前のお寺合宿で……ええと、畑中と、錦織と……」

指折り数える濡に全員の視線が集まる。

「まじかよ……。あれって参加したのって……。俺も参加すれば良かったな」

大介は参加者を思い出してそれほどでもないと思いつるも、それでもナマで女子の裸を見られるチャンスがあったことに惜しい気になる。

「えと、それじゃあ徹のも見たの？」

「え……」

ふと気づいたように綾子が口を挟む。その問いかけは濡に尋ねるといよりも、真奈の反応を見たいが為の悪戯なもの。

「うん、見たよ」

「そ、そう……ふーん。そう」

徹が他の女子とお風呂に入ったという事実。しかも性器を見られているわけだから、逆に彼の方も……。

「じゃあ、濡ってば、徹に裸見られたんだ？」

「んー、そうだね。ミナミンと麻帆もいたから気にしなかったけど、そうだね」

「……！」

次々と語られる事実我真奈は面食らう。後頭部に鈍い衝撃を受けたようにくらっとしてしまい、しばし無言になる。

「それでね、徹のつてば満とか裕也のと違ってなんか変な形してた。ミミズの頭みたいのが見えてなんか気持ち悪いっていうか、あかっぱい？ でも、満のも皮がなんかぶよぶよした汚い色で気持ち悪かったし、男の子のつてキモイよね」

「ふふふ、徹って剥けてるんだ。で、満と裕也はホーケーか……」

隣で聞いていた直美は楽しそうに笑う。逆に男子は困ったように視線を泳がせる。二人とも性器に自信が無いのか、はたまた徹が既に剥けていることに焦ったのか……。

「剥けてる？」

「そ。剥けてるってこと。徹のおちんちんがミミズみたいであかっぱいのはおとなな証拠

なわけ。で、逆に満と裕也のは皮被りの汚いチンカス塗れってわけね」

「ふーん、徹って大人なんだ……」

滯はアゴに手を当てて考えたあと、大輔と徳夫を見る。

「ねえ、男子！ さっきアタシのこと初心扱いしたけどさ、あんた達のおちんちんはどうなのよ？ 徹みたいに剥けてるの？ それとも満みたいな汚いちんちん？」

「うっ……、お前なあ」

「そうねえ……。私のおっぱい触って、滯のこと子供扱いしておいて、自分達も剥けてませんでしたらじゃ話にならないわ」

「おいおい、なんでそうなるんだよ」

「脱ぎなさいよ」

「うう……」

「ほーら、ぬーげ、ぬーげ」

「あはは、ぬーげ、ぬーげ」

綾子が囁し立ると直美もそれにづられて合わせる。滯は掛け声こそ無いものの、期待に満ちた視線で大輔を見る。

「な、なんだよ、お前ら！ つか、ずるいだろ。なんで、俺は見せないといけないんだよ。見せるなら綾子にだけだろ……」

「なんでだよ、平等に見せろよー」

「平等って、だって、俺は綾子のおっぱいしか……触らせてもらってないし」

「ふうん、じゃあさ、誰かのおっぱい見せたら、見せてくれる？」

「え……俺は……俺は……」

「俺、見せる！」

ここまで黙っていた徳夫が手を上げて叫ぶ。そのスケベ心に一同目を丸くしたあと、「すけべー」と笑い出した。

「だつてさ、いいだろ。な……」

そんな嘲笑もどき吹く風、徳夫は短パンに手を掛け、今にも脱ごうとする。

「ちよつとやだー、徳夫のばーか」

「あはは、すけべすけべー」

滯と直美がはしゃぎたてつつ、その視線は彼の短パンに向かう。

「じゃあさ、こっちは誰脱ぐ？ 私はさっき触らせたし、次は……」

綾子はニヤリと笑いながら真奈を見る。

「……」

真奈は彼女の思惑を察し、ぶるっと身を震わす。

きつと断れない。またおっぱいを見られる。今度はどこまでされるのだろう。またおっぱいを触られ、おちんちんを握らされ、そして青臭い苦い汗を顔に……。

「はいはい、あたしが見せたげるよ」



のんきな声でした。直美だった。

「え？ 直美が脱ぐの？」

予想外のことに綾子は驚いて彼女を見る。止めようとするが、既に彼女は体操着に手を掛けており、ぐいぐいっとまくり上げる。

運動をしているおかげで引き締まった脇腹と、日に焼けていない白いお腹周り。そこからぐいぐいと引っ張られる体操着は、グレーのブラジャーに引っかかる。

「んしょ……っと、うーんむり……」

脱ぐことを諦め、胸元までぐいぐいたくし上げると、ブラジャーに締め付けられた大きなおっぱいを見せつける。

「ごめん、なんか首にひっかかって髪痛いからこれでいい？」

えへへと笑い、胸の谷間を見せつつ、上目づかいで徳夫を見る。

「あ、ああ、俺は別に……」

色黒なおっぱい。むちっとして弾力のある二つのそれは、魅惑的な果実。手を伸ばしたくなる。ブラジャーを剥して、その中央にあるだろうぼちっとした部分を見たい。

「じゃあ、ちよっとずつね……」

いじわるそうに笑いながら、ブラジャーの中央に指を掛ける。そして、ちよいっとひっぱる。

「……!?!?」

ちらりと暗がりの中、突起が見えたような気がした。

「おい、俺も！」

大輔も立ち上がり、直美の胸元を覗き込む、

「あーん、エッチ……まったくスケベなんだから……」

大輔の参加に直美は胸元を隠す。

「それよりも、二人ともなんか忘れて無い？」

「え……あ、うん……」

二人は頷き、短パンをゆっくりとおろす。

白いブリーフは股間がこんもりしており、先っぽが少し湿っている。

「えと……」

「ええい！」

大輔は覚悟を決めてブリーフを下ろす。DVDと直美のブラジャー姿に中てられて勃起したチンポが上を向いて顔を出す。

「わあ、緒方のちんちん、こうなってるんだ」

「へえ、男の子のぼ……ぼつきしたおちん……ってこうなんだ」

直美は顔を近づけてそれを見ると、溘も興味深そうに顔を近づける。

つんと漂うおしっこ臭さと青臭さ。顔を響めつつ、ぴくんと上下運動をするチンポに二人とも興味津々だった。



「な、なあ、直美、おっぱい、おっぱい……見せてよ……」  
「うん」

言われてはっとして直美はブラジャーを下に引っ張る。布地にひっかかり、しばらく溜めてからぶるんと顔を出す大きなおっぱい。

普段から着替えの時に惜しげも無く、むしろ挑発するようにしている彼女だが、やはり生でおっぱいを晒すことは無い。

やや色黒で洋梨のような形をしている。むっちりとした弾力がありそうで、彼女の腕の中でむにゅむにゅと低反発をみせていた。

中央の色素の濃い部分、やや大きい乳輪と小指よりちょっと小さい突起。AVのそれと比べるとやや色が薄い。

「直美のおっぱい……」

ぼんやり呟きながら、大輔が手を伸ばす。

「ちょ、だめ。おさわりはだーめ」

けれど大輔はそれを拒む様子はなく、伸ばされた指先はちよんと乳房に触れる。

ふにゅんと指が沈む。少し冷たい肌触り。抵抗はかすかにある。ちよんと掴む。撫でるようにして掴む。すぐくすすすべしていて、柔らかくて……。

「ん、やん……ダメっていつてるのに……スケベ」

作った鼻声で言われると、大輔のチンポがびくと上下した。

「あ、なんかでてるよ……おしっこ？」

先ほどから凝視していた溻が驚いた様子で言う。

「いや、これは……」

自分のチンポの先っぽから垂れる粘液に慌てる大輔。釈明しようにも彼自身何がなんだかわからず、真っ赤になってしまう。

「我慢汁だっけ？ さっきその女の子が言ってたよ」

テレビを指さして溻が言う。

「へえ、これが我慢汁なんだ……」

ねばっこい糸を垂らし、生臭さを醸すそれ。溻は指を伸ばしてちよんと触り、感触を確かめてみる。

「なんだろ、なんか臭いし、きもいし……」

臭いを嗅いでいるところを背後からどんと押される。次の瞬間、指が口の中に入ってしまった。

「きゃ！ もうなにをするのよ、なめちゃったじゃない！」

「ごめん、ちょっと見ようとおもって……、あらら、舐めちゃった？」

綾子は悪びれもせずに言うので、溻はむっとした様子でティッシュに唾を吐く。

「もう……」

「どんな味？」

「さあ？ 知らないわよ。知りたいなら自分で舐めてみれば？」

「こんなの舐めるのやだわ……。そうだ、真奈も興味あるよね？」

「え、私は……、そりゃ、あるけど……」

反対を許さない綾子の威圧に真奈は仕方なく頷く。

「じゃあさ、ほら、ちよっと舐めてみよっか？」

肩を掴まれ、大輔の前へと引っ張られる。

鼻をつんとつく臭い。おしっこ汗が凝縮された臭いに目を背けたい。けれど両肩を綾子に掴まれてそれもできない。

「ん……うう……」

目を細めてちらりと見る。大輔のチンポは浅黒く、前に見た祐樹のモノに比べてやや大きい。ぶよぶよとした皮に包まれている亀のような頭。先端が少し見え、たらりと粘液を零している。

「ほら、早く」

急かさず、おすおすと指を伸ばす。

ひんやりとした冷たい粘液。手にべとりとつき、ねちゃりと伸びる。

「う……」

臭いを嗅ぐ。生臭い。ネトリとしていて気持ちが悪い。

ふと顔を上げると、大輔がまじまじと見ていた。

まるでAVのような状況に彼自身、興奮しているのだろう。普段教室で見せるような軽薄で粗暴な態度が無く、性的欲求を持って余しつつ、それをどうして良いかわからないようだった。

「舐めてみなよ……」

綾子の言葉に逆らうことなどできない。

真奈は口を開けると、できるだけ唾液を出そうと努力する。指に着いた我慢汁を唾液で覆って、舐めて、飲みこんだふりをしようとする。

「……ちゅ……」

指を軽く口を含み、口腔内に触れないようにする。

「……………んちゅ……ちゅ」

粘液の付いていない部分に唇を付ける。口腔内に大輔の我慢汁が触れないように意識する。けれど、臭いがする。男の性特有の臭い。

「どう、おいし？」

濡の問いかけに首を振る。

「うそ。真奈、ずるしてるよね？」

彼女は真奈の浅知恵を見抜いていたらしく、手を取ると、そのまま引っ張った。

「ん！ あ……」

窄めていた唇が指を舐めてしまう。粘液が唇についた。せつかく涎を溜めたのに……。涎のおかげで味はしない。けれど口の中にこびりつく。すぐにでも吐きだしたいのに、それをできる空気など無い。

「うふふ……、よかったね、真奈、興味あったんでしょ？」

綾子が嗤いながら真奈を見る。悔しい。逆らいたいのにそれができない。

奥歯がちがち合わさる。何かを言おうとすると涙がこぼれそうで怖い。

きつとここで泣いたところで誰も味方してくれない。綾子のことだから、それを見越して、次にどうやって大輔をけしかけようか考えているはず。だからせめて泣かない。我慢する。それが正解のはず……。

「おーい！」

廊下をばたばたと走って来る音がした。

「すまんすまん、なんかDVDがおかしいんだって？」

比呂の声がして、皆冷静になる。

大輔たちは慌ててズボンを穿きなおし、直美も胸元をシャツで隠す。

濡はDVDを取り出すと、近くの戸棚に隠す。

証拠を隠ぺいしたところで引き戸が開く。比呂の後ろには無然とした恵梨香と、なぜか和人が居た。

「先生、ディスクに傷があつて再生できませんでしたよ。なので、我々は感想文どころじやないですよ」

綾子が何事も無かつたかのように言うと、比呂はすまなそうに頭を軽く下げる。

「すまんすまん。DVDだと劣化しないって勝手に思い込んでた。それに、もういい時間だし、下校でいいか？ 先生、まだ掃除が残ってるから」

「ええ、構いませんよ」

「じゃあ、今日は解散。気を付けて帰るんだよ」

「はい。さ、行こ、真奈」

綾子は比呂から見えないように真奈を隠して部屋を出る。

「あはは、もうけもうけ」

直美たちも感想文免除に上機嫌でそれに続くと、代わりに和人が宿直室に入り、戸棚を開ける。

「葉山君、何してるの？」

和人の突然の行動に綾子が振り返る。

「雑巾を探して。先生の作業が大変だから、荷物運びしようと思って」

「そう、たしか雑巾ならこっちに……」

綾子は慌てて戸棚を開くと、雑巾の束を取り出す。あまりに多く敷き詰められていたせいもあり、ばさばさと落ちる。

「あらら、もう……」

ちらかった雑巾を大雑把に拾うと、例のDVDを隠した戸棚にしまい込む。

綾子がホッとしているのを余所に、比呂と和人は宿直室を出た。

「ああ、そうだ。大輔と徳夫は手伝え」

「え……」

「いいじゃないか。ちょっとバケツで運んでもらうだけだし」

顔を見合わせる大輔と徳夫。

「いいじゃん。さっきのこととか楽しかったっしょ？」

直美が意味深に言うと、比呂は不思議そうに皆を見る。

「何かあったのか？」

「いえ、なんでもないです。それより、さっさと終わらせましょう！」

先ほどのことを追及されては困ると、徳夫は比呂の腕を引っ張り、作業場へと急がせる。

「うん、まあいいか……」

どこか気になるところがある比呂だが、それよりも水漏れのほうが一大事と急ぐ。

「ふう……、おかしな女ね」

綾子は直美の後ろ姿を睨むが、彼女は能天気な笑顔で比呂たちに手を振っていた。

「あ……」

教室で直美が着替えをしていると、二つ気づいたことがあった。

一つはブラジャーを外したままだったこと。

きつと宿直室に忘れてきた。

今から取りに行くにしても、どう言い訳をしたものか……。

「ま、いいか……」

替えのスポーツブラをつける。古いせいで少しきつい。それだけ膨らんだと思うと誇らしくもある。

「ふう……」

ぱちんと裾を弾くと、上着を着る。

もう一つは見慣れない男子が一人居たこと。確か三組の子だったはず。クラブ活動の後片付けを手伝っていたようだ。

「さてと……、理恵はまだみたいだけど、先に帰っちゃおうかな……」  
鞆に手を掛けると教室を出た。

十

「……………」

クラブ活動の後片付けをしていた若築武則は目を丸くさせながら、今起きたことにどぎまぎしていた。

突然やってきたと思うと何の躊躇もなく体操着を脱ぐ直美。

次の瞬間、ぼろんとおおきなおっぱいを丸だしにしていた。

洋梨のような二つの乳房は、彼女が短パンを脱ごうとするのに応じてふるんと揺れる。

先端にはちよんと起った、肌と色素の違う乳首が見える。

すごく柔らかそうで、彼女の体躯が前後するたびに揺れる。

彼女は何か気付いたようで、体操着入れの中からシャツを取りだし、着始める。

スポーツブラだったらしい。

ぴたっと彼女の上半身、胸元を締め付けるスポーツブラ。

丸い洋梨が少しひしゃげてしまうが、ちくびはぴこんと立っている。

女子のおっぱいを見たのはこれで二度目だけれど、女の子によって形、色が違うのだと改めて思う。

終始、凝視してしまっただが、直美はまるで自分のことなど存在しないかのように気にせず、去って行った。

「……………はあはあ……………」

チンポが固くなっているのを感じる。胸騒ぎのようなモノが胸を上下する。

軽い眩暈を振り払い、掃除用具をしまう。

「どうかしたのかな、僕は……」

武則はもやもやした気持ちを持ち振り払うと、自分の教室に戻る。俯きながら足早に廊下を歩く。すると階段の曲がり角でぽふん、むにゅっとした感触。少し酸っぱい雨と汗の生乾きの臭い。それとクリームのような臭いが混じったもの……。

「あ……」

顔を上げると直美が居た。

普段はきつい印象があるけれど、活発な可愛い女の子。にとイタズラな笑顔は男子をよく蹴っ飛ばしたり叩いたりするときに見る。

乱暴なのだけれど、その表情で怒れない男子は多く、自分も多分できない。

「ねえ、傘ある？」

「え？」

「かーさ」

「あ、うん。傘ならあるよ」

「良かった」

笑顔になる直美を見て、彼女の目的が想像できる。

「それじゃあ僕の分が……」

「なんで？」

「なんでって、石渡さんに貸したら……」

「え、貸してくれるの？」

「だって、傘って言ったじゃないですか」

「あるかどうかを聞いただけだよ。濡れて帰ると髪乾かすのメンドイ？ から？」

土砂降りなこの雨で傘をささずに帰りたくない。特に親しいわけでもなく、家が近いわけでもない直美の頼みを聞く理由が無い。

「でも……」

「ふー……。いいじゃん、さっきあたしのおっぱい見てたよね？」

「え！」

声が裏返るぐらい驚いた。直美は武則が盗み見ていたことにしっかり気付いていたのだ。同じ教室に居たのだから当然といえば当然なのだが、全然気にする風が無かったので意外だった。

「そんなこと……」

「うっそだ〜」

むんずっと股間が掴まれる。

「……………へえ」

「……………う……………」

「固くなってるよね？ ね？」

ズボンの股間をさわさわとされたあと、まだ固くなつたままのチンポをむぎゅっと掴まれる。

「う……ん」

「なんで？」

「それは……」

「あたしのおっぱい見たから？」

「……………はい」

さわさわとチンポを弄られると、不思議と身体が浮かぶような感覚がする。もやもやした気持ちが高まり、鼻の奥で火花が散らかったような気になる。

「じゃあ、見物料頂戴。いいよね？」

「え……」

「いいじゃん、あんたは男なんだし少し位濡れたってへーきだよ」

項垂れ、傘を手渡す武則。

「ありがとう」

にこりと笑うと彼女はチンポから手を離し、代わりに傘を受け取る。

「あ……」

もう少し、もうちよつと股間を触ってもらいたかったような……。もう少しごねていればあるいは……。

「ありがとうね」

階段を降りたあたりでもう一度直美が手を振るのが見えた。

「うん」

女の子に優しくした。それで十分だ。そう自分に言い聞かせて、もやもやする興奮と心残りを拭いたかった。

これ以上あげないようにと顔を上げて廊下に行く。するとまたもトスンとふつくらした衝撃。

「わっ……………んうう？」

「うふふ、エッチ！」

曲がり角を曲がったところで再び直美とぶつかった。彼女は誇るように胸をはっているせいで武則の顔は先ほど見た二つの柔らかな丘にうずまってしまう。

お寺での合宿では触れることもできずに遠くから眺めることしかできなかったおっぱい。それにまたも触れてしまった。

自然と股座が苦しくなり、鼻がつまる。慌てて顔を離すけれど、目が離せない。きつと自分の視線がどこを見ているのか、彼女にもろバレだろう。

「ねえ、あたし、貸してもらおうと思っただけじゃないんだよねえ」

「え？」

「君の傘に入れてって言おうと思っただのにさ」



「え、あ、ああ、傘のこと？　そう……」

ほっとする。この土砂降りの中を傘無しで帰るのは憂鬱だった。直美はすげけとした性格だけれど、まるっきりいじわるというわけでもないらしい。

「ありがとう」

「それはこっちのセリフでしょ。君は卑屈過ぎ」

「ごめんなさい」

「そういうところだよ」

「あ、そっか……」

「ほら、帰ろっか」

「うん。うん？　でも、僕と一緒に？」

「あたしは借りる方じゃん」

「でも……」

女の子と一緒に帰るのは気恥ずかしい。普段から満に抑圧されているせいで卑屈さのある武則だけに自分なんかは女子と一緒に下校するなどと考えてしまいがち。そんな態度に直美もいらいらし始める。

「ほら、どうするの？　濡れて帰りたいの？　いいじゃん。別なクラスなんだし、この雨なんだから誰も気つかないってば」

「そうですか。じゃあお言葉に甘えて」

「じゃあ一緒に帰ろ……」

「直美――」

廊下の向こうから女の子がやって来る。二組の長峰理恵だ。

癖の無い黒髪とアーモンド形の瞳、赤い唇は少し前まで色白の肌と相成って日本人形のよきな印象があった。最近はずソフトボール部の活動のせいで日に焼けており、やや美少女という印象が薄れた。身体付きも直美が隣にいますとかなり見劣りしてしまう。損な役回りな女子だった。

「ねえ、傘持ってる？　私、忘れたっぽくてさあ」

「あら、理恵も無いの？　どうしよう。三人はちよつとねえ……」

「三人？　君も一緒に帰るの？」

傘の事情を知らない理恵は不思議そうに武則を見る。

「ぼ、僕は大丈夫です。二人で使ってください」

見た目のわりにおしの強い理恵に武則はすぐに折れる。視線も合わせずにそそくさと下駄箱へ逃げるように向かう。

「ちよつと待ちなよ」

そんな彼の手を取る直美。

「大丈夫です。僕、馬鹿だから風邪ひきませんから、これぐらいの雨くら……い……」  
腕を掴まれた先から感じる柔らかな感触。思わず見ると、またおっぱいを触らせてもらえ



ていた。

「ちよっと直美……」

「傘、ありがとね」

にこりと笑う直美。またからかわれているのかと思うけれど、柔らかい感触にチンポは正直に反応してしまう。理恵が不愉快そうな視線になり始めたところで武則は靴も履かずに校舎を飛び出した……。

「それじゃ、あたし、旧校舎のトイレに隠れてるね」

「ああ。わかったよ」

帰りにピュアハートに寄る時、待ち合わせは旧校舎のトイレにしている。というのも、他の子達が居ると隆の車に乗りづらいから。

「できるだけ急ぐから」

隆はそういうと修理もおざなりに大工道具をしまう。

「うん。待ってる」

明日香は精子が染み始めた体操服を雨で軽く濡らし、先に廊下へと戻った。クラブが終わって午後五時。あと一時間したら帰るふりをしてトイレに隠れる。それから隆の車でピュアハートへ行く。

久しぶりのセックス。

さっきの射精の量だと、隆はかなりため込んでいる。すごく可哀想。だからめいっぱい気持ちよくしてあげて、させてもらって、出してもらう。奥に。そうすると、お腹が温かくて気持ちよくなれる。それが好き。

「~~~~♪」

鼻歌混じりで廊下をスキップする明日香。そんな彼女の背後に人の気配。

「？」

振り返るも誰も居ない。しばし歩いて、もう一度……。

「誰？」

「……よ！」

階段の角から顔を出したのは笠原雄太だった。

「……」

良い気分が一転、嫌悪感をあらわにし、きつと彼を睨み付ける明日香。というのも、彼とは理科室での一件からして非常に険悪な仲なのだ。

「そうツンケンすんなよ、明日香ちゃん。仲良くしようぜ」

「誰があんたなんかと！ 顔も見たくないわ！」

ふいと顔を背け、廊下を早歩きする明日香。雄太はさすがのように走りだし、へらへら笑いながら下手に出る。

「そうかっかすんなよな。可愛い顔が台無しだぜ？」

「あんたに見せる可愛い顔はありません！ あんまりしつこいと大声出すわよ」

交渉の余地は見せまいと強気を装う。彼には嫌な思いをさせられており、そのことを広く噂されるのは困ること。けれど、隆はそれを知っていて、自分を支えてくれる。だからこそ強気を装える。

「ふーん、いいの？ 明日香ちゃんの方が困るんじゃないの？ つていうかさあ……」  
「なにが言いたいのかしら？」

「んー、明日香ちゃんのこと、俺見てるからさあ……。ほら、いろいろ知られたくないことあるんじゃないの？」

意味深な言い方をしているが、具体的な言葉は出さない、出せない。ここで下手に反応しては雄太の思うつぼだろう。だからこそ、無視を貫く。

「さっきだつてさあ、DVD 見ないで……に居たの？」

「……え」

胸にどきりと刺激が走る。

宿直室でのことをなぜ雄太が知っているのだろうか？ 彼はあの場に居なかつたはずなのに……。

「まさか抜け出してねえ……。あんなことしてさあ……」

「……何が言いたいのよ」

抜け出したことは真実。そして、あんなことをしたのも事実。それに服は精子が滲んでいる。

「それは明日香ちゃんが良く知ってるじゃん？ 俺はただ仲良くしたいだけだし……」

足を止めた明日香を見て雄太はにやりと笑う。お揉むるに手を伸ばすと体操着の胸元を探ろうと……、

「いてええ！！！」

「触らないで！ この変態！」

伸ばされた手を捻り上げ、爪を立てる明日香。雄太は思いもよらない反撃に呻いてしまう。

「ふん、大方転校生にでも聞いたんでしょ？ お生憎様、あたしは何もやましいことなんてしてないもん！ このスケベ！ 顔も見たくないわ！」

唾すら吐き掛けそうな勢いで捲し立てると、明日香は強引に話しを切り上げ早足で教室に向かう。

「いちち……畜生……。なんだよ、明日香のやつ……。んー……」

明日香の予想通り綾子から入れ知恵をされていた雄太だが、肝心の事は何も見ていない。それを見抜かれた間抜けさのペナルティとして手の痛みを甘受する。

だが、いつかはきつと明日香にエロイことをしてやる。そんな黒い闘志を抱いていた……。

十

廊下を歩いていて彼の耳に雄太と明日香の言い合いが届くと、急いで隠れて様子を伺うことにした。

雄太と明日香の仲が悪いのは知っている。同学年の子の知るところだと、明日香は中村昭利が好きで、坂田広樹が横恋慕をしている。笠原雄太は下心で明日香を見ているだけ……。

胸を触ろうとしたところを見る限り、その予想は当たっている。ただ、あの小心者の雄太がたとえ二人きりだとして、胸に手を伸ばすほど大胆になることは意外だ。つまり、そういう行為ができるきっかけがあったのではないかと疑える。

そして気になったのが転校生という言葉。

鬼瓦村に転校生が来ることは稀で、違うクラスであつても覚えている。かなり前に中倉綾子が来た。その綾子が何を考えているのかはわからないが、彼女は何かと他人の頭をおさえたがる節がある。

そんなことは彼にとって大した話ではない。女子同士、誰が権力を握ろうがおままことのようなもの。そんな認識だ。

ただ、気になることがあるとすれば、彼女が先ほど雨どいの補修作業の中、なにをしているのかということ。そのことを雄太は知らないのだろう。だが、明日香は思いたるものがある。だから足を止め、強い態度を見せた。そう分析できる。

そして、自分もそれが気になっている。下半身の不自然なたぎりが、話の行き先に耳をそばだたせるのだ。

もし、機会があれば、あわよくば……。

そんな気持ちがある中で芽生えることが意外だった。

「おい、もう帰ろうぜ……」

誰かが来る。やり過ぎす為に近くの教室に入り、息を潜める。

誰だろう。誰でもいい。どうせ男だ。

それよりも行くところがある。

旧校舎のトイレ。

明日香の待ち合わせの場所だ。

十

「直美、あんたこそ風邪ひかないんだから傘ささずに帰ったら？」

武則が走り去ったのを見て、理恵は腕組みしながら呟く。

「ん〜。あたしくせ毛だし〜、濡れるとぼわつてもりあがつちやうんだよね〜。ストレートヘアな理恵タンがうらやましい〜」

髪を撫でながらくすくす笑う。

「ったく、これみよがしにおっぱい使うんだから」

「いいじゃん。傘貸してくれたんだし、少しぐらいね？ それに、あたしも優しい子に触られる方がキモチイイかな？ かな？」

「はーあ、うっさいうっさい。ほら、帰るよ」

「あーん、もー、理恵タンもすぐにおっきくなるからさ〜、怒らない怒らない」

「誰が怒ってるのよ！ いつときますけどね、あたしはあなたと違って脳に栄養が回って



るの。わかる？」

「はいはい、リエタンは賢い賢い」

「くく。これだからおっぱい……さ、帰ろう」

廊下の向こうで誰かの影。理恵は澄ました顔になると、直美を促した。

「へーいへい。理恵タンはこういう二重人格なところがねー」

「……うるさいわね。ただ猫被ってるだけでしょ」

小声でこちゃこちゃ話す二人だった。